

# 教区新報

第6号

発行 浄土真宗本願寺派 兵庫教区教務所  
〒650 神戸市中央区下山手通8丁目1番1号 本願寺神戸別院内  
電話 (078) 341-5949

## 救いを説く中に潜む甘えと居直り

### ＝基幹運動のめざすもの＝

御門主が教書の中で、「自分だけの殻に閉じこもらず、自分自身がつくりかえられ、人々の苦しみに共感し、積極的に社会にかかわってゆく態度も形成されてゆく……」と明示されたように、基幹運動のめざす処は特に「自らの体質を改める」ことにあります。

自らの体質とは、一体どのような体質なのでしょう。私自身を振り返り考えてみたいと思います。

まず宗祖が教え導かれた、生死いづべき道の「道」を聞こうとしなかった。自分に都合のいいことだけを聞き、聞かぬばならない生命の問題、即ち平和や差別等、社会の苦悩に関わる問題から逃避して来た。そして、自分の都合のよいことだけを話して来た。つまり社会を問題とせず切り離し、個人だけの問題に終始し、自他共にお法の上に居直り、甘え、自己陶醉してきたことではないでしょうか。

このような甘えの精神的素地となった要因は、ひたすら現状維持、ことなかれ主義の中に埋没し、無関心を装い、宗祖の教示を自らの問いとして問い直す作業、つまり聞法されてきたことであり、耳きわりのよい御聖教のお言葉の響きに酔いしれていたことである。

(一) 宗祖が「歎異妙」の中で、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は万の事、それごととたわごと念仏のみぞまことにて在しませぬ」のお言葉は、「まことなるお念仏があるからこそ、それごととたわごとの世界を生き

きることができるとですよ。」と述べられたにもかかわらず、受けとめ方を間違え、厭世的、現状逃避としてお念仏を隠れ蓑にし、「世間に甘え、居直りの態度をとつてきしなかつたか。

(二) 「一念多念文意」の中に、「凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず絶えず」のお言葉を、「凡夫だからあたりまえ」と聞き直り、「何をしても無駄」と自らに「甘え」ではこなかつたか。

(三) ご和讃に、「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもらまじ」とか、「是非しらず、邪正もわからぬこのみなり」と、等を挙げて「信仰さえ確かならそれでよい、信仰と行為とは別のものである」と云つて、有意義なことをしようと思せず、お慈悲に甘えながら問題意識を持たない生き方をしてはこなかつたか。

(四) 又私共はことさら、「すばらしい教え、すばらしい宗祖を持たせて頂いた」とひとすら「宗祖の人格や教義上に甘え、自己を空想化しあぐらかをかき、机上の論ばかり華やかで、現実には世間の価値を追い求め、振り回され、一個の人間が二つも三つもの顔をもつて上手に逃げ回り世渡りしてきしなかつたか。等々多くの矛盾をはらんだ体質を知られることであります。正にお念仏は私共の迷いの営みを照射し、ゆきぶりつづけて下さつておられます。

企画推進室 藤 栄 行 信

## 御同朋の社会をめぐって

出石組正福寺 山崎 一朗

「御院さん、またお邪魔します。」  
「やあ、ようお帰り、一月ぶりやな。」  
「そないなりますな。このまえ祭りでしたさかいな。」  
「なんか、田舎がよくなったちゅうわけか。」  
「そうでもないんですけど、まあこれは癖のもんですな。帰る癖とでもいいですか。」  
「結構なことや。」  
「それに今度はまた、それ、この前話してましたやろ、あの和男の結婚の話。」  
「ああ、あれな。」  
「あれうまくいきましたんやて。」  
「そう、それはよかつたな。」  
「仲にたつた人がいろいろ心配してくれはつてとにかく話がまとまって結婚でこになつたそうすわ。それやこれやで一度帰

きはなすほど今度自分にあつたときのショックは大きいもんで。」  
「ほんまに、そうすな。それで、今日来ましたのはこの前言うてはりましたな、「差別されとる身が差別しとる」て、あれ妙に心にひつかかりましてな、なんか皮肉言われたいで。」  
「とんでもない。皮肉なんか言うてへんで。そう聞かえたら御免な。それは、なんちゅうたらええか意見いうたらええかあるわけや。俺たち差別されとるんやで、されとる方がなんで同朋講座や同和教育せんならんのや、そんなもん差別しとる側の方がしつかりやらんかい。」そこで無関心ちゅうか白い眼をむけるわけや。しかし、ほんとにそうやろ

「いや、今の理屈な、それお寺はんが言ういやはる理屈と違いますか、聞いたことありませ。私らのまわりにも同じようなこと言う奴いることはいますけどな。」  
「いや、別にお寺はんと限つたわけやないけど……」  
「ええまあそんならよろしいが。しかし、何ですなお寺はんとあんまり同和問題や解放運動好かんのとちがいますか？」  
「どうして？」  
「まあ、好くとか好かんとかいう言いかたしたら失礼やと思いますけどな、これ私らのなんちゅうか次元の低い見方かもしれまへんけどな。」  
「なんやね、あんたらしゅうもないもたもたして、言うてみいな。」  
「へえ、私思うんですがこの同和の問題、解放の運動と盛んになりまっしゃろ、そうするとどうしてもお寺が批判の対象になります。今まで聞かずにこれたきびしいことも当然言われますが、ところがお寺はんてのは自尊心が高いもんでしつちやろなかなか素直にそれが聞けまへんが、つい何吐かすとお腹の中で思いますが、そういう謙虚さを欠いた態度、それが差別につながるというのを本人ちつとも気付いてへん、同和、ふん、解放ふん、てことになつてると違いますか。これ、気悪うせんとくれやすや。」  
「そう、全部がそうとは言ひ切れへんが確かにあんたの言う「謙虚さを欠いた」という点あると思うな。自分でも思い当たるもんな。考えてみると人間「自己反省」や「己点検」なんかで自分が見えたり、変わったりするもんやないで。やつぱり自分を厳しう糾してくれるもの前に身を置いて自分が見えてくるんやな。」  
「ところが坊さんなかさそう言いまへんで。」

「それで、それごととたわごと念仏のみぞまことにて在しませぬ」のお言葉は、「まことなるお念仏があるからこそ、それごととたわごとの世界を生き

「あの子な、今までなにかいうとてましたわ「差別なんてもう今の世の中にあれへん。昔とは時代が違うんや」解放運動やる大人なんて馬鹿にしてみました。それが今度はさすがにゴツンと頭ぶつったわけですかいな、ショックだったようでつせ。」  
「そうやろな、差別ちゅうもんはこれが差別でございませうてぶらさげて展示しあるもんやないさかいな。振り子みたいなんもや、自分から離して遠く向こうへつ

「あの子な、今までなにかいうとてましたわ「差別なんてもう今の世の中にあれへん。昔とは時代が違うんや」解放運動やる大人なんて馬鹿にしてみました。それが今度はさすがにゴツンと頭ぶつったわけですかいな、ショックだったようでつせ。」  
「そうやろな、差別ちゅうもんはこれが差別でございませうてぶらさげて展示しあるもんやないさかいな。振り子みたいなんもや、自分から離して遠く向こうへつ

「あの子な、今までなにかいうとてましたわ「差別なんてもう今の世の中にあれへん。昔とは時代が違うんや」解放運動やる大人なんて馬鹿にしてみました。それが今度はさすがにゴツンと頭ぶつったわけですかいな、ショックだったようでつせ。」  
「そうやろな、差別ちゅうもんはこれが差別でございませうてぶらさげて展示しあるもんやないさかいな。振り子みたいなんもや、自分から離して遠く向こうへつ

「あの子な、今までなにかいうとてましたわ「差別なんてもう今の世の中にあれへん。昔とは時代が違うんや」解放運動やる大人なんて馬鹿にしてみました。それが今度はさすがにゴツンと頭ぶつったわけですかいな、ショックだったようでつせ。」  
「そうやろな、差別ちゅうもんはこれが差別でございませうてぶらさげて展示しあるもんやないさかいな。振り子みたいなんもや、自分から離して遠く向こうへつ

「あの子な、今までなにかいうとてましたわ「差別なんてもう今の世の中にあれへん。昔とは時代が違うんや」解放運動やる大人なんて馬鹿にしてみました。それが今度はさすがにゴツンと頭ぶつったわけですかいな、ショックだったようでつせ。」  
「そうやろな、差別ちゅうもんはこれが差別でございませうてぶらさげて展示しあるもんやないさかいな。振り子みたいなんもや、自分から離して遠く向こうへつ

「あの子な、今までなにかいうとてましたわ「差別なんてもう今の世の中にあれへん。昔とは時代が違うんや」解放運動やる大人なんて馬鹿にしてみました。それが今度はさすがにゴツンと頭ぶつったわけですかいな、ショックだったようでつせ。」  
「そうやろな、差別ちゅうもんはこれが差別でございませうてぶらさげて展示しあるもんやないさかいな。振り子みたいなんもや、自分から離して遠く向こうへつ

「あの子な、今までなにかいうとてましたわ「差別なんてもう今の世の中にあれへん。昔とは時代が違うんや」解放運動やる大人なんて馬鹿にしてみました。それが今度はさすがにゴツンと頭ぶつったわけですかいな、ショックだったようでつせ。」  
「そうやろな、差別ちゅうもんはこれが差別でございませうてぶらさげて展示しあるもんやないさかいな。振り子みたいなんもや、自分から離して遠く向こうへつ

「あの子な、今までなにかいうとてましたわ「差別なんてもう今の世の中にあれへん。昔とは時代が違うんや」解放運動やる大人なんて馬鹿にしてみました。それが今度はさすがにゴツンと頭ぶつったわけですかいな、ショックだったようでつせ。」  
「そうやろな、差別ちゅうもんはこれが差別でございませうてぶらさげて展示しあるもんやないさかいな。振り子みたいなんもや、自分から離して遠く向こうへつ

# 門徒推進員コーナー

## 私達のあゆみ

連研に参加させていただいて、私の無字さに気付かせてもらいました。  
このわたしが求め聞かせていただかねばならない事をしらせました。

幸に一行寺から、二名、連研に参加させて頂きましたので住職様に相談に行き、色々勉強させて頂きたいと云いますと、協力して下さいました。

仏婦の会長さんの協力を得て、まず足もとからと思ひ夜門信徒のお宅をまわり参加をおすすめ致しました。若妻の方に少しもお寺へ足をむけていただきたく思い、ようやく十四名の方が気持ちよく参加していただきました。まず会の名前を「朋友会」となづけ発足しました。第三金曜日夜八時から勤式作法、手芸、歌の練習、等を中心に学習しております。早九年の月日がたちました。現在は三十名となり、本当になごやかな会になり、楽しく聞法させて頂いておられます。

何かお寺の行事のお手伝いもさせて頂いたきたく、おねがいしました。  
一月一日の「元旦会」除夜の鐘とともに、門信徒の方々や、近所の子供達に、温かい「うどん」の接待をさせて頂きました。皆さんによるこんでもらいました。本堂いっぺいの参拝者でした。  
五月第二日曜日「初参式」今年生まれた子供さん、生長を誰よりもねがっておられる阿弥陀様と何時までも絶える事のないご縁を結ばせて頂いております。  
手形を取ったり、母と共に写真を撮ってもらい、にぎやかなひとときをすごします。  
八月十日「感謝会」門信徒の中で、かぞへ年七十五才以上の方に御集りいただいて、長寿をお祝い、この機会に仏縁をいただきより佳き人生を歩まれる事を、お祝する会です。お抹茶の接待もさせて頂いてもらいました。楽しくお手伝いをさせて頂いておられます。

中央研修を修了された方や、連研修了者の方、十四名の人達、互の法味を語り合い、教義作法を学習する会「慈念会」を結成しております。これからもお念仏一すじにがんばっていかせていただきます。

## 組の活動

### 仏社の結成にむけて

掛竜東組は、兵庫県西部の掛保川東岸に十九ヶ寺が、南北に細長く点在している。南部は播磨工業地帯のベッドタウンとして著しい変化をとり、北部は農村の素朴さを色濃く漂せている。まさに現代日本の縮図の一面面をかいま見る思いがする。私たちの共通の悩みは、地理的に南北にあまりにも広いため、日常的な交流が大きく制約されていることである。行政区でも姫路市、龍野市、揖保郡太子町と多岐にわたっている。先般の組画変更によって若干以前より行政区が整理されたものの、地理的な問題はいぜんとして解決されていない。また、兼職住職も若干あり組内寺院の実態は多種多様である。

このような状態のなかで、僧侶の連帯をいかに構築するかが大きな課題としてのかかっている。したがって、組として何らかの可能性を追求し、模索している段階である。

現状を強いて云えば、持続的なとりくみとして、第五期「連研」が実施され約五十名の受講者が熱心に受講されている。これには「連研推進委員会」が組織され、事前にカリキュラムの作成、運営等について意志統一を行っており一応軌道にのっている。特に中央教修終了者(門徒推進員)六名の方々が、当日の出欠とり、グループ編成、班別の話し合いの司会など、まさに「連研推進の核」として活躍されており貴重存在となっている。

○神戸別院報恩講(11月27~29日厳修)



(27日連夜法要より)

多田 覚 円

掛竜東組相談員

## 伝道

一人いてしも 喜びなほ  
二人と思え 二人にして  
喜ぶおりは 三人なるぞ  
その一人こそ 親鸞なれ

親鸞さまの生きられた時代は、天下の実権が貴族から武士へとわたっていく時代でありました。だから、世は正に争いによる動乱時代であったといえるでしょう。このはげしく移り変わるいく社会状況と、もろにおつかつた親鸞さまは、そこに、人間性そのものにこそむ法のすがたをみえ、みづからを「煩惱具足の凡夫」と思い知らされずにはおられなかったのです。

世と人を問うという根本的な問いの中で、当時、仏教の主流であった自力の道に絶望し、ひたすら「他力の救い」を仰ぎ、阿彌陀如来さまのお慈悲の前に、すなおにひざまずかれたのであります。限りのない智慧と、おおいなる慈悲をもって、ダイナミックに活動するみ仏との出会いを出発点として、力強く人の世を、浄土という真実の世界にまで生き切っていく道を進みつづける親鸞さまにとって、お念仏とは、限りのないのちを得て、この道を進むに、おほしき姿であると受けとめられたのです。

みづから、この道を進み、この道を進まざるを待たずして下さった親鸞さまへの喜びと、お礼の心が、すなおな形として表現されるのが「報恩講」という仏事なのであります。聖人のひ孫さんである覚如上人さまは、親鸞さまの三十三回忌にあたり、そのお徳をしのびながら「報恩講式」という文をお作りになって、これを声高らかに読みになりました。これが「報恩講」という仏事の始めと云われています。

一月十六日、親鸞さまのご命日を迎えるにあたり、毎年一月九日から十六日まで、本願寺において、ご正念報恩講が営まれていることはご承知の通りですが、親鸞さまとともに、み仏の暖かい心の中に力強く生かされているものにとつては、心のふるさとに帰るような思いで、この行事に参加して、声高らかにお念仏申すことでもあります。

神戸浅組 行願寺  
久 堀 弘 義  
(モダン寺テレホン法話より)